

松居直さんに聞く

——「こどものとも」から

——ジブリまで——

聞き手・灰島かり



1926年京都市に生まれる。同志社大学法学部卒業。現在福音館書店相談役。『松居直のすすめる50の絵本』（08年、教文館）ほか。

今さら言うまでもなく、松居直氏が、日本の子どもの本の世界に寄与した功績は計り知れないものがあります。福音館書店の出版部門を創設し、発展させ、世界にも類を見ない一話完結型の月刊絵本「こどものとも」を創刊。すぐれた画家や作家を輩出し、数多くの名作絵本を生みだしてきました。

松居さんは、「こどものとも」の編集長として活躍しながら、同時に自ら健筆、弁舌をふるって、絵本について論じ続けてきました。編集長、社長の激職を経て、現在は「絵本の伝道師」として活躍を続けておいでです。時代を画した松居さんの仕事ですが、その力はいったいどこから生まれたのでしょうか。そして松居さんの考える絵本とは？ 現在「こどものとも」の付録に絵本についてのエッセイ「絵本はステキ！」を連載中の灰島かりさんにインタビューをお願いしました。

絵本の絵を読む

松居…僕は、言葉・日本語が非常に大きな問題だと思っています。絵本の絵は、全部が「言葉」ですよ。松の木を絵を描けば、「松」という言葉になるように、文章に書いてないことが絵の中にいっぱいいてある。だから全感覚をフルに働かせて絵を読まないと、絵本は読めない。

子どもはごく自然に、それができるんです。ところが大人